三七全傳

占夢南柯後記

第三篇

特別
へ13
3148
13

へ13
3148
8
13

再編占夢南柯後記序

洪容齋曰漢藝文志七略雜古十八家以黃帝長柳占夢十一卷甘德長柳占夢二十卷爲首其說曰雜占者紀百家之象候善惡之證衆占者一而夢爲大故周有其官周禮大卜掌三夢之法一曰致夢二曰觭夢三曰咸陟鄭氏以爲致夢夏后氏所作觭夢商人所作咸陟者言夢之得周人取焉而占夢專爲一官以日月星辰占六

夢之吉凶其別曰正曰噩曰思曰寤曰喜曰懼季冬聘王夢獻吉于王王拜而受之及舍菊于四方以贈惡夢舍菊者猶釋采也贈者送之也詩書禮經所載高宗夢得說周文王夢帝與九齡武王伐紂夢協朕卜宣王考牧牧人有熊熊虺蛇之夢召彼故老訊之占夢左傳所書尤多孔子夢坐奠於兩楹然則古之聖賢未嘗不以夢爲大是以見於七略者如此魏晉方技猶時

或有之今人不復留意此卜雖市井妄術所在如林亦無一人以占夢自名者其學殆絕矣又李瑩財貨銘曰財貨將至夢寐可尋或穢或虺乃玉乃金穢可親歟虺可玩歟敢獻斯銘以激貪夫由此觀之夢非故有吉凶應報而爲有吉凶應報者偶然耳諺曰癡人面前不說夢余所說豈夢寐吉凶耶人間萬事莫非夢者因命是篇以覺蒙昧云辛未初冬朔　玄同陳人識

福
左
勲
葉
冨
左
冨
左
つ井ようのり
ろんじ姫
赤根半之進
蛾松貴郎
小畔の尼
石太郎
ミやこう尼
半七

統井須勝

玉枕御歌
天つ代のかさ
かるこそ
この月ごろ
金ぞるぞ
うれし
弥日の雲

り。千人の詩を賦し文を作るふ。撿る紙左右の壁ふ貼して常住坐臥て
これをんこと是を喰ひそり。一字の損益あるとき必ず是を改むとのん。もるに余が
毎歳の著編ハ只速ふ成をもて利とせ。この為ふ絶て一ひとびも稾本を更ひ匠め
五六日。まづ時代を定め。地名をトし。人名を撰ま。許多の脚色を巧生しまろして
藻を綴るふ。茅ハ人の動ふ任し。文ハ意ふ出るふ任して且くも止ふ沢の手ふ遠
波のうちかさのうたる。ね悵脱あるとき紙ハ粘して是紙改るのこ。余嘗我編ふ
一風を為ん。文ハ雅俗をまぜうとらひども。猥ハを好まどこ。是婦幼ふ通し易ら
ざる故ふ。又唐山の俗語を切ぬるよ。是どこ是流者文字目るれど。讀ふ隨て
頗ー解しバこ。但その趣雑劇ふ似るあり。もるれども雑劇と同じ。又雑劇ふ
似ざるあり。もるれども雑劇と含るが如き。件ー里耳ふ入るをもて肯とするのこ。
今年著を不日年ハ皆成るこ終りて年ふの著編指を倩ふ至るとひども。赤嘗旨
骨を学んど。所云讐者蛇ふ懼ざるの類なるべし。　　玄同陳人再識

三七全傳
第二編　古夢南柯後記巻之五　　東都　曲亭馬琴編次

後快第一

附言

おもうそこの物ふ。もうハ。もん文十九年ふ起て。同二十一年ふ尽る。前後
僅ふ三年を経しのみ。蓋前快四巻ふ説とこ殆。天文十九年
冬十月六日。赤根半之進。父子夫婦。蜂松曾太郎ホ浪速の
法善寺に考妣の善提を吊ひしるる。敗鐵全ゆが養母
晩稲が夢の事。孝子全ゆ千日墓ふ絶茶を獲て。匠めて父の
仇人を知るる。敗鐵四五六晴ふ全ゆを殺さること蜂松曾太郎
面を犯して。順勝を謀ること。赤根半之進君命紙受て茶谷山へ
赴くるる。樵夫の林原ふ全ゆ赤根半之進を埋伏さるる。晩稲

自然にして。たゞあて素性を物くるる。赤根羊之進更よ主君乃
小刀を獲くるる。四五六全め夜米谷山るる本精塚を要る。順勝
怒て半之進を砕くんとするる。ずと進塾居のる。順勝胃太郎ふ
命て。半七を沈の中湯へ滴さる。辯天堂よず七初花よあ全玉枕
四前陽法を正して。陰よ半七初花を助るる。もべて十回沈の中湯の底を上下とせり
前性四巻てよ盡この編へ釜松平紙ぐるよ起て。ぎゝくず七初花ぐ
頭末を説くり。今蜀て二帙とするのへ例の青鮮が示考ふこそ。

秋雨の釜松上

半七初花ぐるの。その曉よ胃太郎より消息して。密ふ半之進ふ
告よけ是へ赤根ぐ闔宅更ふ一層の憂苦沈ずして。ずと進ぐ憤へ。
さゝふもいはど。三勝へいとでゝく。若ゝ紅くよ胸を若ゝめ。ぐ子のよ紙
もりひるる玉枕沈前慈悲深くをゝませば。ず七初花へ密ふ
金沢助らる。沈の小舟よりち乗られて。水門より脱る出ようとす
嘆けば。ぜそりのエふおびえて。又慰るよ。あゝ紙れどさ沈るへ
良人のうゝ限らせのの日数もさのふあて果ようけへいるる。仰や
あゝと問うもるる物をひよ。肩根をひゞく隙のるけ是べ。遁むと
るれど。私幸妙女るんどのえ紙や。彼紙よ集舎ふ園居て。
主の陰支へ。もうさてくるれ柱ふ身を倚るへて。痞を楚と押て
とう。浩知よ。腰えよ使つる。女の子遠ゝ麦ふ来て。園花さ夏山
さまの。清末のひぬと告よけ是べ。三勝忽地沈を撞ゝ。ふとう沈ぬ。
とそあゝめ。すゞ客房へ誘引てよ。いそぐしてふ是べ。毒もあへど去
去程よ。三勝へ并取て。鬢掻揚て。帯を結びそえるゝどして。縁頻

佛ひの客房の障子引開て裏より入まゝ園花八丈絹を京染ふくる袿衣ふ白云垢の衣二ツだゝり下襲ふそいつゝよ撮絹ちる襠衣ふ練乃帽子紙戴き夏ふ入おず絹の色異るふ仁田山細の緋裏衣まくる袿衣よ白云垢の衣二ツ紋二ツ欽襲てちゞらの練貫よ緋裏ある襠衣の下ふ僅ふ三歳四人の平太郎が熟睡を抱けるが其よ帽子ふ素うう従者ふ後門の裏よ憩とちゞくて庭の築垣よ腰掛ける抽箱の油単垣より上ふ些一ふ一ふ当下三搗ふ園花夏山ふ対ひて送よ秋の冷ふ安否紙訓問恙ふ紙を祝ふ家公曩ふ殿乃勅気を蒙ふせのひてふ畏ふ親族ふとも訪ひ訪ふ紙えせば百日あまり中絶ふ入ふるふのあゝ新婦ば

さふ使ふて俄頃ふかふ訪せふ物詣のふさまやいと綺羅ふ紀打扮ふて来のひふと憂ふ紙憂とふいふで外して結る底意を推量る墨花ふよかまど面ふまいひも名ど数ふ紙ども家公の側室平紙が母ふ結まゞもどふの衣着ふらんとて騒まふとふ誰ふいふんかふ其ふ紙居ぬ世の務ふ疎ふけまど。それも良人の志ふ惜らゞとその髪化粧云苦ふ紙推ふひね。特ふけふ限ふある月数も化ふ果ふれど宝刀の往方ふ知ざるふや加補昨夜のふ宝七ばふふる紙悔まゞふたふと義中の風呂人の口ふ戸も来れ稀ど開るふる紙良人の閨門ふふふ人ふ文いふる。崇やふんとうち歎けど歎くのそる女子のかひるさ呉子平紙ふ居る月ふう瘧病ふて今ふ差ど寒熱

とする病ゑみん。何高誠ん暇もるる。只夏ごとさ〜對ひ。まらん
やくやとそひつ。そひろ祢さる物詣かる時ふん殊更ふ。憑むん神徳
佛力と。春日の社へ月詣さもる驗へるけまども。家公るりもん牙
るるり。悪るるく坐さるるるこれも春日の摧護るるめ。牙ようとの使さ
るるりつふ祢ど。半七ごるる吹がるる月。君所の沙汰もそりとるるく賽を
牽ふ夏ふ侶て推懸客。物ろつ〜えれわるるに。そるるとる。接〜ふんそ。
うち籠て坐さる友う。顔のえも常るるふ。ま七いろにるりけん。
幸く命を助ゆ〜ん。玉枕ゆ前の賜ふて。良のうちの鈴び。とんも
ゆ〜ふの。妨ゆ前の。靴を隅て癬を搔く。ゆ〜ふの中推量ま〜べいと
痛〜と。半いんせど。三繕ん眉根を顰め。喃。墨ゑどの。ま七〜と名の
隅の圓く〜るる祢ど寳へど。彼も又良人の肉牙もん牙が生ぬるめ。

とそ。ふの〜嘖げふ寳ふる。ふ論ま七が不孝不孝ろいんでりの
るるるぐら。その水えんもん牙が妊ゆ。初花どの。淫奔ようとまれ
〜るるろ氣の愚さ。智者も勇者もきふん強人。狐が落ねべるる
るるふ。舊の人ふん弱もるるど。いひ生てもふんると些のるも氣よ
るりて。日末ふ仇げる〜角牙ごろ。茨の刺を柳の糸ふ。愛理を
通〜てうち微笑ま。妨さるるの何寳ふやらん。吾倩ゆもん牙乃妹
るるふ沒や。ま〜ふ〜ば侵の半七を生ぬりのとて憎むべさ。恨がありや。ぞま
祢〜。いる恨がある秋るる紀ろんまふ祢ど。妹ふもせよ。雪ゑどの。ん牙が
兄ゑん二代の執柄氏とひ。緑とひ。大和ふ。ゑえ〜名家の末。吾倩ゆ
もん牙が妨るりとも。又ま育月。この牙ゆ舞妓賤〜い母が氣ど。凛〜る
ま七が淫奔を。笑ふとるるふ。初花ゆ。養〜ふ仇ての淫奔ろ。叙母ゆ

他の淫奔ゆゑ。あん子が乳より別て、人の異父の妹妹でも。生涯ゆるすまじきひとつ。喪めの掌と母ゆらん。月末の妬さ紙匿あくさど。新婦は前俗て彼飾せずさぶるいひよまて。吾倆をよよ疎せて。あん子が母屋へ居んとう。憑しい妹君のる時ふ孫子ふ。吾倆も乳つう。有べきこと思ひ妹ふこて。とあざこ笑ひつむひ火を。燒つけらまて。罪を見も。忍ぶよえんさど面報ゆるる。禍衣の衣紋匿。ちろ弱ねるの寛ふろれまて。ひ〜さの僻るせば。ゆりに時五六年。そひほそうて病ゆせね見あるとられざる。穿て絶てるれるのと。談ふつ證文を出し後まて四十あまう。齢も既ふ小動のいそぎ近きる孤しげるく。支媚執て何ふせん。児孫のんるめも差あるなど。妬るんがとて理るれるど〜く。妹ふいふりの欺歳いんでうと。膝立ち

せば。罪を見も。ちろ〜ふどるふ。小膝ふ。むる傷つさふ。夏ふ後方ふう。ちびく密とう引母の袂も只ふろうれとそふうひるく。揮放されて又携禁母さふ。こまて怪ふ〜ばや。腹ふ〜ふれるのあうとも閑彩らんて坐〜まふ。母屋へ来ふて声ふる。淨ひるふ大人乳ふ。傳罪ふる胞姉妹の。賢女夏婦と養れし。松の樵と今さらふ。易て送ふ仇ふ。顔ふ抱をんせるる。血で血を洗ふ世ふ。滋ア新濩と後ふ只悔〜ふ。ちびとるもあふん。外伯母さ負ふて〜。乳さ乳も結まふの人び憎ふ〜ぬ人を恨唧て。生常ふ人あふ物いひざまも。有べきるのと。ゆ〜ふ慰てふ。雖近ふ訪せのひ〜ふひもあれ。角外伯母さふ。真の胞姉妹ふをいせびこそ。ふまれるのをも。穿え四答。まびれるふ紙も四答そふ。ち腹ふ。ふりのふ。それも。蔭ふ滅ふ

舟一艘ふいふ親の注裏と。ろひろて許させめと勧解る徒気さ
性制さ沢。ころお差る雪花と背あわせの三鶴ハ人向もやらぬ冷
笑ひ。母はひとりでいひ屋ん うとて加勢ふ求ずせ引婦ハ察
口状ハいと爽るろ。吾倚も古紙巻てそ付る述七と云号〜。初花ハ
おん身の妨ハ前。彼窟毒ふ細ものぐ平紙ひとりと詠も字ぶえ
こるりちふるりのひて。乞憂こそ在らあと取も著ま沢潮晴
せられて。夏山ハ忽地ふ貞ふ夕陽の映るぐら。袖ハ涙の雨濡〜ひ。又
ふるもるりけり。論ハ吾盃と雪花も。副帯引締立あぐり。
夏山何も宣ふる。つべいふのこと狂女と同着家公ふあぐで殆る送憾
さハ限りるけまど。そも執次ものハる。瘧病さる平紙ふ面も。
さたまぐ公りとる。誘ふちるくといそぐせど。母立ねる紙

あるふ。引ハ忽地揺覚されてよくと噂る平太郎を。袖ふ抱緑
敲つけても。泣止ぬこふふせんもぐるくふ牙を起も夏山ふるも
雪花ハ今。ころ母屋ふ遺まぐも。閑りかゆ〜孫廂縁頻の障子引
開て。出んとまれば外面ふ吉うちぐふ人音〜。君所ふりおん使
さもひらふと。門ハ吐嗟とぐろ三人ぶ狗ふ。斜と着く立止ぬ。
雪花ハ今更ふ坂るふもえくらまぐ移ハ。夏山を見ろくう。おん使
ありと門声を。聞てハいでぐ殆るぐ。今一時ぶ家公の生死定ふ
をハるぐ。此方へ来ませと藤ふ。案内まろる文の宿所先へ
立つ縁頻ふ。土居の枕戸露ふ死。袖ふち合を狗の中。おるも
いでぐ俺〜ふ。納戸のかくて牙と避ふ。

秋雨の笠松下

赤根が宅より松平作、んぬき君命を伺ふ

笠松平作

三うつ

平之進

ゐひ定めしとのぐら。三猪ハいとゞく。幾も公のあゐ。床の懸物にゐわに。物いそぶハ〳〵とり納まべ。半之進ハ衣裳を整障子左右〳〵開くして。式臺まで出迎へ会ゐ〳〵と給仕よ。庭門狭〳〵と後者ホぶ舁入る輪子を。敷莨の平まで。横さまよは著まべ。半之進ま婦礼儀正〳〵。猪子の戸をゐあけハ。どゝ尤まべ使者ハ別人ゐゐ。赤根ぶ三男平紙之亨年こゝよ二十一。齢稚ホの二代の笠松弟長吉〳〵相貌秀〳〵きいと白く又美く。病中ゐれハ月額ハ熱毛のどゝ。黒ければ眼睛さえいゐ〳〵。茶褐の肩衣長袴搖ゐよう先さ生之刀を緣よ。突之て揺ぶ生徒者之者衆倍と之て。うち絶ひ家ゐる大人。外母公母美ゐ中坐ゐる。親子の恩義ハこれ私。瘧病ホて籠居まどゐ。君命脱ゐよ所ゐ〳〵。ゐん使を奉て笠松平紙幾向ゼゐ。ゆよ後者ホ。没ホ〳〵退て。門外よ且〳〵ホそ〳〵と

いそぶ之ー。誘赤根ぬ。役令ゐれば上坐を。詩ーゐと刀引掲床間を背ゐゐて。居長吉〳〵ゐゐと坐を。扇ゐひも重ゐ。殊ゐ気之ホ三猪ハ果まて果てうち瞻ゐ。君所ゐゐゐゐん使といゐめゐ〳〵門を。伺人ゐゐんと云ひゐ〳〵。此方の二郎の笠松どゐ。ゆよ君命ゐれば之。釈を釈と白云ひゐ。虚物倖ハ。瘧病の。熱ホ浸されゐひゐん。といふを之ゐゐゐまゐ逆ゐ礼ゐゐ。と推黙ゐゐて。恭ゐて〳〵礼を低ゐ。ゐの仙使ゐ孫ゐゐ。ゐまちいゐとゐ〳〵。用居のおゐれば設もせど。おゐの隨ゐ管待ゐ。乃字〳〵悼ゐ質素。仰の新ゐけゐゐゐん。ゐゐゐ〳〵席を。ゐゐひまべ笠松扇を勝ゐ衡ゐて。赤根半之進謹で承まゐ。汝いゐゐ二月十七日。米吉ゐゐ木猜塚を裝風流士の大刀を。ゐ生ぶきゐ。ゐん使を。ゐ清ゐぐら。太刀ハ失ゐと偽ゐて。ゐまゐ釈進せど。前後

三百日ふ近き光陰をつゝがなく送りしハ。偏ふ主君を侮るふ似たり。
それのゝ家ふ流長男まさ七ハ。配所を脱出て。淫楽紙事とせり。これ
人ゝるゝ所ふ非ずんや。よりて件の白徒をバ。柴浸の刑ふ行ま
ぬ。俳その罪又子の間よあり。此彼犯ととろ軽きよ和ど。
格外の慈愛をりて。今日切腹せしむる条。仰の旨件のごとし。
述もあくぬよ三勝ハ。涙ふくむ目を拭ひ。
いと恨しげふ平紙をつゝがとうんと嘆ゝり。釈の危窮を救ふかくても。
まうし甫ゝハ子ゝるの道。さまで考ふあらばとも。又が頭刎ちハ使ハ。
推辞ゝも推辞ゝるべきふ。撰擇まれしを身の幅ふ。病を推て釈の宅を。
踏荒ゝに来る氣剛ゝの。現浮ゝ逆さゝの世ゝるゝ。妹ハ嫁を孤しめふ。
新婦と孫ゝ紙ゝぞ来ゝるゝハ又釈の死を促を使ふ立ゝ来ゝ。

もそれぞ。幼稚ゝ死ふハかゝまぞふ鬼ゝもとハゝんざりしふ。雲花
のゝゝ。その子まで。仏神天魔ふ鬼ふ奪れけん。使ふ立ゝる君も君。形ゝ死
ゝハ情ゝ孫ゝど。昔ふハ似ぬ當家の成敗。伍子胥死して呉王滅び。
范増去て楚国頓ゝ。世の常言も今更ふ。ひゝれて哀しゝ。と
世紙恨ゝ。又身を墓ゝの。一声ゝ。ゝ法沈めバ。平紙ハうち仰ぎて呵ゝと
冷笑ひ。ゝふ口競ゝ。故事ふ歴直釈が身を代んとて。親を
拝ゝて名を残しハ。廻魯聖の取ざる不。遠き漢土ハ。ゝまれかくれ。
近く本朝保元の。むゝをゝくバ左典廐義朝ゝ臣又為義を誅し
たる。勅命ゝれば是非ふ及べど。賞ハ臣の求る不。四刑ハ君の行ふ不
豈私をりて論ぜんや。この為ふ男子ゝるゝの。家ふ在てハ釈ふ事。
出仕てハ禄ふ死を。忠孝両ゝぐら全くゝぐ。ゝるゝ。怨言傍痛と。

他ぞよ挟まれば。半之進莞尓と笑ひ。保元の順逆は。先祖既ふ
れを論ず。上は兄弟牆ふ鬩ぎ。下は釈子仇をなすと。三綱紊まく
人道立ざ。ひが君も又如此なり。使者の人侍ころえぐさし。全く
こと昌のもん僻る。といはせもあへざと眼を睜り。医として君を挟せば。
と且て紙忠義とつべき狡。さる馬庶りの生とまぶべ。縛頸刎まね
前ふ袖を拂てるざて去ざる。言承せぬは命代惜むやいな。争命を
惜むべき。まくらば仰を推辞まくうさん。
推辞ざは切腹の。用意ぞ。といそぶせば。すぞ進座をなて。注沈を
とる女房を。佶とんやりてやとさ三拶。孫て覚れの上るれよ。とう
孔ぞは武士の妻ふ似ざ。縁言のれ変肚断刀。ぞくりて。と焦燥
ふぞ。を乖もるみざをとれ拭ひ。ろれ拂ひても沸くる。引捲の水も
湯とるのんどさひるふ早れ爰の世と。ぞくども又ひろ絲て。ぞまふ
身を起し。図遠けまべ有れとも。お通陶五郎はいるぞまれべき。
せめてまたぶ宅ふをくべ。ちらら草ともるくまるの紙。まく
後房ふ妹はをんど。良人の未期を外まして面牛せぬは鬼鈴蛇紅
るぶ腹貧さねど呉ひとり。こらふをまども赤根どの。子とるふ
のこるる讐敵やてもかくても五郎倩のを墓るくれとおりくとて。
出雲の神や結びけん。今ふをんぶめね悪縁の糸の素とるふせん。
と潸然として納戸のろこ去んとさる紙遣りもるさば。平紙ちと
声とるけ。内室且く南りるへ。肚断刀はこまあり。といひつ腰る
扇を取て半之進ふ投与る紙。滕へも落さぶと右まふ受扇と用て
刀とへと問べ平紙滕まう寄せ。式紙法ふよろて自殺と行さるへ

真の武士なるべきを。罪犯すれども當家の家
廼一等の紙降さんて。古例に任せる扇腹を潔へ親子の好を平能よ
つ斗つまと。亦是尼の命令と。説示せば事を進へ扇をとりて
嘆息し。その罪はあらぬとつぐもの。志を述ると死へ君の非を遣るを
紙とり。実に諫言容れざる紙まる為に米谷山にて肚を切ひ。
尼は曉ぶせをんと。ひしとも鶏の常齟齬てへ今こゝに死て盃
を引き抜く平能が。又の先へ三勝へ。覚悟つも忍ぶ。走りをれば
笠松へ。妨をみと長袴の裾潔うして寄つけ程ど。左へ後へ。
右手に携る紙。事を進んるに沼堪ぶ妻の帯際に戻し。膝に
押へて動せば。いざみ潔と合掌をとんば。健気に観念あれと平能に
又が背後に刀尖を。肩より肉へと突出し。又肉へ引く又を。
そう直つて腹の肚帯の。結目のあうを弗と断ぶ。ぐるぐると釈る
帯とともに鮮血さらと濃う。大腸小腸長ぶ。ぐるぐる笠松へ
まづ沼堪ぶ又を捨て。腎屠に撞と倒る。青ふ。結と見えく表
事を進へ。のくふうちも騒ぶ。後見ふくも潔しと。汝さつく
事をうるんぶあう。血色の常るぶざる。ものゝ毎に呼吸繁死へ。
深疾屋ぬとまりあぶら。そのせんやうを入るこ。又に代て死んと
そふへ。子のおるべけまど。汝へ。笠松氏と胃せーぶ。コぶ子に
まてコぶ子におらぬ。実又に孝紙ぶ。養家を断へ。
あらぬ。うるれと紙まてけ。と聴く察する言の柴も。今ぞ
敬ゆく子の為に恩愛の涙落かく。膝も放めば三猪へ慌忙き

豹を起し。平紙をうんで吐嗟とだろう。気つくろうのひゝも折易き。
玳瑁の弁の落てころうも素足髪長き別まつるるりける紋と
煙ろうつてやりゆくふ抱き起せば平紙ハ眼を睜て息を吻。養こ公
外母に前假初るぐら。ふあるぬ悪言をさとて憎〻とあがりけめ。
るれ豹と孫てろくども。てめとろ朋白ふ主君の内意をほげ
がこて親を罵り死を促せハ。実るるるふ移ど五百生日るるるめふ
生まやせん。平紙がけの自教ハ全く養家を断よあらばい生
君又の為るるとつふ毎よ流まこ生る。鮮血の上へうつ傷ふ作きんと
さる紋三彷ハ背ろう抱き留めやよ平紙どの集躁のハぐ危ろん。
いとあるべけもせん。且く紋結あるるへ虚言るるとハまふどて。
る獣よ比へつ。いひ罵りるる女子の浅ち。家公のるるるめ。

かどろうの志るるらんや。さぐるるりけるるどぐ口の。今ハるるく
狐し。妹ハ何和よることぞ。夏ふ山前ハまぐまふぐ。狐子夫婦
一生の別まこもるるべきふ。とふくべ平紙ハを樓母ふも妻ふも孫
ろう。受ん弱さこゆふ今永ちよ注まつハまてふ。おのぐ黄泉の障と
るるらんぐるうち捨て置るへ抑此度又兄の厄難。つふもゝく抱ひ
進ふせん。と千くふ紋昔えてもも才浅けまべ漆畧るゝけふと暮。
翌とあるせば。ん平限ある月数も尽たる。その夜兄云ハ濡衣めるる
名を立ても狐をちりハ誠よして皇天の憐るへべ辛くして。命よるん
るるとるくどもこれも又又の罪を平ゝるるん。所詮平紙ぐ命を捨て。又
ぬんの罪を贖んと云くどもるぐ君よ。見来るるのハぬ瘡病とるるる
かうさるるるひろ移て母と妻とふ抵意を告。狐の歎と吾妹ぐぐ。

涙を硯に揚流し。只ひたすらと遺簡に。通骨筆を染まされば。八声の鶏も乱れ啼。暁方に及ひもうけど奉輪到来火急の呂状病を忍びてそがまゝ。ひたすら糸を。と仰の旋どころ辺ぐさく取るるの紙取もあへず出仕せしに。君邂逅近く見せられ。没を咲るの別義なるべし。是より直に。まつ之進が宿所に。あれて。又は迫腹切せるべ。笠松の家に恙なけん。否とまうさば没も脱まじ。罪の次第如此と。仰ゝみなりつて。翌死入り。てみて死るべ萬は一。又を赦へ至るべ。と云ひ決て些とも強ず。主命に。上天まろ庶人まで。孝をなして国を治め。家をそのくゝを備る。犯は詰腹切せよ。とるは仰をうけこころ弱ず。且まつ之進え未罪の。たはを不為とて。その子は結しめんに。続井家の断絶に。更は躍をめぐらべ。只願くは平伏が。命をあらて又と。是が罪なの死罪を許させ。君の不忠の段稼しをもんに憚あれど。ず意なれば。うるうんせば。まうさんよりは只こと。のたはと。田舎も果ず。懐叡を引接て。左の肝へ突立まべ。吾君大死は。警死なるひ。早うまろ壮佼頓腸が底意をまろせん。その刃を。引まわ。そと遠く。みづから其紙をめひ。泣声を細めて。寛ふ。いあるに。是茶谷の妖気を。うんで。武をなして是を殺んと。ひしくば。風流士の大力をまろ出さべ。ようと。老臣どもは。説示せば。爵右郎にいく。諫め。半之進に諫めば。是血を把せ。万と。て。茶谷。赴きしに。彼の彼知に自殺。主と。諫んと。くるよ。曩は。之進が。悔て。遺し。半之丞。一。遺書をうつてさんでめて。知覚て。風流士のるはひ。絶されども。

まつて事こゝ進を許さるゝ人。家法こんなり。素より やせんかくいへが
順従が。牙の非を飾るに孤しんれども。臣こゝて君より勝をいつぐ
赤根が本意とせん。且くこゝまで紙推籠おれて。又せんとべも
あるべきふとこゝひしがつが底意をがまづ慎しゝて。ずこゝ逆の世を
憤りつゝ自害をることのやとこゝひるこゝてずこゝを此の中洲へ
掃ものしゝ恩愛の絆を被てずこゝ進り自殺と禁んを為ざるふ
こゝひこゝやずこゝ七の又親をこゝあまりふ法を犯せが。罪科脱と
かこゝとくども。玉枕がかひしくて。彼ホ婦を延しこゝりこゝるふ
限まる日数も果新より半七がぬまこゝ衣のこゝ紀名こゝ立こゝんが今更より
ずこゝ進と。免こゝふ免されざこゝんがこゝこゝつずこゝ。罪ありものを
屈ものべき。病者より卧こゝりとこゝ以ずこゝりど。赤根が二男。平紙と綸より

官こゝ。こゝがこゝの有紙その又より。告こゝるせがやとて俄頃より召こゝせ。
言を設て試こゝるに親の危窮とこゝろ以こゝて。こゝが面りより肚こゝ切る。
孝公男敢傳ものし。情むより堪こゝる壮俊こゝんれども。その深疾でい助り
かこゝけんこゝろこゝあれど。早こゝて狗死こゝとこゝろこゝ。汝父より代て死こゝる紙
りて。一旦ひこゝるこゝが意も達。半こゝ進ず七が罪免こゝべこゝ道を以
たり。せあこゝてこゝのまこゝ苦痛を忍びて。実又の宿所へこゝがこゝて赴こゝ。
潜ものこゝが意を伺こゝ親子こゝまこゝ婦一生の辞別をものせこゝろ。と叮嚀より
仰下こゝれて。帳より被こゝ且こゝ。疎こゝ。こゝ取て平紙が。疾口を
絞せものし感涙数行より及ひのこゝが君恩忽地牙より溢こゝて。こゝろに
べき言葉もるのこゝ。只伏拝こゝ。伏拝こゝ。涙より。こゝれ。こゝ。遠侍こゝ。こゝ。こゝ
生病ひ再蘇と投帰こゝて。公利こゝる私事。某甲を据より。霸より事の

甑を。母と妻とに告させろ。病中の使者なれバ。強て濡子紙許されて。
親の家にハ来りけれど。主君の恩命を犯んに。忍びずと見ゆる哉。
明白に演も傳へず。親に対ひて法外なる。挙動をせんや暁りて。
君命を重んじ給ひし。室に父ハ父なりけり。往方知れざる日ん半七。
周防なる娵身へ便もあらバ平作が。今果の一句傳へてよべ。かうりて死
憑を進らせるハ。母の夫妻のる。僕に三家なる平太郎を。外母后前稽と
斉して。生質後に笠松の。家をつがしてなんまで。いかよしも存秋蝉の
声もかりもなく歎きの本棟に三勝を存ん。とさへど胸の裂るが如く。縛すう
振つ泣叫べバ。奥にかよと声立て。泣園花に百夏山が抱れ。叫んも
友音して。親子三人輾び生。左に右に携れども。禁なく偏へ無子なる
風消すんとするこなが子の息つ紙。兄果も留せず。室花へ身も浮ぬ

べき袖の両。笠示しげなる笠松を。万果とよで言祝て。育て今云ふ
廿一。初孫なれ挙ても。まづ一幅の附紋も。まかり合せがたろうければ。
結句縊き親子の縁。自殺のよし紙まらせしなり。新婦も吾傳も
諸共に。生しる紙補せざれども。臨終にあはずやと宍ふ紙を鬼そし
まで孫携て来ハ来ても。端なく出すといひこしされバ。亮陽一重を
生死の境。めの昔しげに宣ふを。嘆て居る母女房ハ。共に刃に腸を。
断るよりなほ苦しさみ。せるかたなくて待るべき。娵君のハ三人の子
あり。吾傳過世のよしら。稼ぐや。只ひとりなれ。男のんの武藝
大道孝心なんで。人なるに優れても。又人なるに勝れてする。夭折てハ
何かなれせん。その身一世の孝行をば。一日に盡さよ。と返すぬとさへを
かへとて。口説つ嘆入れバ。背撫ふんと言へども。ちからざるなれ夏山も。

母も痛しと己が身はつらし。姉さまは今ハ先だちて。なにかは見えても。
四年限りの片鶉。望まで向の草の原。露ちかく袖と卿んより。
共々に死してかれまと。良人のひとりにおくしる。刃をとらんと志し
しが。三捞窒花傍より。抱き禁めて引退て。死んとおもふハ理なれど。
乳ぶ子は離れぬ平太郎。せめて母親おもんふハ成長するでいるぞかし。
身の幅廣くぞよべし。死ぬるのを貞女といはんや。絶るんとせる夫の。
臨終正念をさめて。後の世帰よこそ貞女なれど。いひハ諭せど母も
外母も。涙はワりぬ歎きの数く。喃窒花どの。龥ふハいとも口さがなく。
いひ罵りし。腹もたちけん。かくあるべしと思はぬ身の。そも脱れぬ
良人の運命。共々に共は自殺して。赤根の家をさけよりて絶
なん。妹ハ側室といひながら。笠松の家はなれば。平継夫婦かの児

なりぞ。縁坐の尤おふせどと。とまでとまでぞ争りぬ。妹といへど義理
ある人へ。無理とするべし。悪言ハ。なべてもこれは置とも。なさがかるるよし
なるかぶべ。よし嫁らんと宣ふとも。引も留てかくべきは。夏山どのいひと
いそう。抜はしくぞありつらん。さるとも面すし。許しくとて。勧解る姉
より。勧解られて。妹と姪する身面ぶせ。物体ありと宣ふみ。妹ハし
隔意のおもべき欲たどめより。かくくと告ちらるべきとなるぞ。
主君の内意平継が。不孝を化ませぐとそひしのされ。買詞ぞまる
かけぬひそ。といひ慰ら慰られても。慰ら体し哀別離苦三宗
児も蛇がさふせてや。母の膝より遠下つつ。只片息なる父の
顔をさし覗てハ。爺と呼び。又覗ては。婆阿とのべ。是を宛とて子
の顔乃。おハせ有とまかりて。とおのく目と目注しつ。つかつと哭バ

ろと注く。平太郎が声よ平徙へ。ゆ寄る眼を開き。母に
さゝゐり夏山も武士の女房よ孤げる死愁傷。時夜通霄泣あし
ても。母注足ゝぶやゆくもうて。ゆ家ゐる大人今日ゝ閑居
閑門の赦免状頂戴あれと刀の下緒よ。結び著しを見出て。すき進へ
このとえきぞ。母を父き眼を閉黙然として居ゝ。免状と吹て
形を改め。双の手に押戴きろ。うち開きて讀ぐごち。微臣が孤太
空しゝゝぶ。主君教慢の仁ゝろとひるかくゝゐ。べ災害消滅続井
家ハぎゝく繁昌ゐゐん狩。これ併平徙が忠孝の致を所ぎ
子ゐぐら什帛よ。ぞめて永く功を賞せん。適奇特と押開き。
あふく扇の言葉の要それうみゐうて安堵ゝぞれゆぞと。
取おぐる。母よ携ゐる母女房三拐も諸共よ竭る春衣ハ是非ハ

ゐれゝら狩よ先ゝろとて。何ゐいゝぐ事のあべき。喃雲霧どの
同胞四人遠離をまべず七がうくハさらし。お通陶五郎ホが後よゆべ
ゐゐる遺憾ゝ。現宜ハゐるゐ。ゐゐゐゐ半七ハきのハ生て。ゐゐぐ
遠くゐゐぐあれど。居ゝくゐん去ハ往方ゐれど周防といべハ西藩尾九。
百里とゆらん。二百里とゆらん。あゝゝ吹けば花多の翅借ゝても
速の河よ。ふゐゐもかゝゐんでゐらひゆる。西の天ゐを恋ゝけま周防亭ゆ。
ゐ足。青耗ゐゐゆ。築山の庁所ゝゝ人の来ゝゐ。そゝゝ為未由
遥ゐゐ。ゐゐも歎の霧雨よ。養生ゝる大男子。ホ戸ゝゝ走ゝ
来ゐ。平ゐ進を佑ゐ。ゐんて注進ぎゐ。ゐと呼ゐる声と共よ養生掻擲捨
まべ下ゐ腹巻篠小手髄當縁頬ちゝく。ゐをゝゐ。領よ喘て
吻ゝく。息ハ肩ゝゝ揺出ゐ。長途の労ゐとゐんてけまべゐ。ゐ進ハ

九郎
自殺をあらためて
松作
再び
君命を
述ぶ
その花
ゑの山
平太郎
平作
仙野呂東二
さんろう
右の仙野
炊栗
千里より
国離を
告ぐ

忙しく。淨水浄るる柄杓を取て。温湯よりすぐ咽喉を潤さセ。
めづらしく思ひ給ふ。櫛姫よ冊をて。周防山口へ赴くべしと。
及べども。面會せるにようの。炊粟耶太郎。注進とかにな
火急の大事欲いうゆく。と縁ゆう小勝をもれば。さしゆく。言一朝
ゆうべ。こいつども。その本末を告ゲさん。抑陶權頭晴賢ハ大内の
權柄をるよ。その威をさく主君を凌ぐ。されば老臣杉。石田。鷲津。
坂良田。宮。三吉。秋原。月高よ至るまで。その威ふるそれて比周せり。
きるにいねる二月のを名樂山の浦所よ於て。宝劔を拾るめあり。
義隆さんと齋さるふ。続井駿ゆう贈られ。陶流女の大刀よ佩は
くり。是をん豫てはなべ。陶流士の大刀あ。あ欲。大和ゆう飛び
来りて。ひぶ家宝とるんあ。未曾有の吉夏ことて。曩よ晴賢よ

ものうし。陶流女の一刀を。召進べ。と仰るよ。晴賢つやく
従ひぬ。却件の宝劔を賜べ。とそ。ゆべ。義隆大きよ怒ゝセ
ものひて。陶を誅せんとも。ゆ。冷泉治部少輔ようて。且く抗豫
きるものひ。ゆ。の母憤よ堪ゆ。晴賢よ同滅させんと
謀ゝセものひて。尼子退治の大ゆよ即陶をさ。向れ。腹の近臣
きる。江良丹後を後陣として。中よ挽で討ゆんとて。謀を授ゆる。
きるよ江良ハいひぶひるゆ。ゆゆゆて晴賢よ。如此くこと告
ゆべ。晴賢大ゆよ怒ゆ。怒ゆ。その気るゆべ立地よ。ゆひきゆ。
きゆゆゆんとて。富田の稚山よ屯ゆ。軍兵を裏まべ。時を移さず
安穂弥五郎。大宰小貳千壽丸。赤月三角をそゆめとして。同意の
軍勢三千餘騎。忽地よ著到せり。頃ゆ八月廿八日。義隆かくと

まろ〻たるさぶ草狩さして慰ちんとて。瀧の法泉寺に三日三夜
御座を移され。拝山の奥に催さる。法勝寺の晴賢へ。ひが軍兵等ぞ
生立を。義隆よりせめ。ひとしてを。九日の暁方に。法泉
寺へ推よせて。鬨を咄とつくる。搦門よりぞ乱れ入る。義隆主従
五十餘人。そひろけざることなれば。脱出る所と。教て出立入るものの
賊兵の。或は射落し。突伏薙伏。瞬間に。三十餘人を。殺されども。
敵方勢なれば。物ともせず。雁野弾正。敷る伴入道。弱みを入うえ
息をも継ぎ。四方より火を放て。鬨叫で。攻入らるれば。宿直の
近習ふ人。冷泉隆豊。天野徳内。三浦戸井田。仁保石田等を。際と
御箭。射尽さう。組で刺ちがへ。対死をする。隙に義隆
朝臣は。廣縁に。走り出。半弓を。敵に。柱。矢種も既に尽しぬ。

みよりや
さうさぶ
の歌を
室町殿
日記ふ
冷泉隆
豊が辞
世とあり

小薙刀を。ひつさげ。散し。自分は防戦時。紙をうつして。今はかうして
おはせしぬ。客殿に。走り入て。腹を切り。
みよりや立ぬ。ひとも。雲も。おろそかに。[illegible]風の。跡も殘らぬ
と詠じつ。猛火の中に。飛入て。茶毘の煙と。なりぬ。ひとも。あはれ。
雪も果ぬ。こゝろ。つゝ。ふと。三勝寺。花。月と。月を。注する。夜とも。平。俗も
耳を傾け。おの〻。奇く。愛るけば。まを。進。膝を。直し。陶が。反逆を。乗よ
乃ぶ。義基。紀伊。と。槻姫。へ。悪るくや。坐を。つゝふと。同を。て。炊。栗。と
面。のぶ。ふ。額を。拭。さんが。中。将。義基。朝臣。へ。築山の。御所。を。せ
ん。晴賢。ぞ。て。市。所へ。推よせ。迫腹。切。せ。る。痛。紀。伊。姫。ろ
養。又。持。明。院。の。一。忍。肝。も。陶。阿。波。よ。撃。を。ひつ。凡。防。長。豊。筑。ろ
四。人。囲。み。晴賢。よ。属。ま。さ。ぐ。べ。天。地。反。覆。時。節。到。来。ま。ら。れ。ど。も

穂姫へ。貴殿の息女お通どのと。仙野呂東二よ冊を。後門より
落ちのびと。慥よ受けど往方をもとめ。主の先途よえあへね某
何を面目ふる存命べき。單身なりとも。賊軍の中よ走り入り。
さう死よ死おやと。ひしひしが。縦賊兵三騎三騎。殺ろうて死さる
とも。九牛が一毛なり。大和へ注進るさだやと。ひろうして百四十里を。
僅五日よ走りぬ。べきさるいひ果ぬ。牙の懈の中を訳あへ。
かくのごと。腰の刀を。肚へつき立て。引繰ぶ。庭の井筒へ跳入り。
おて空しくなりしぬ。半之進へ今よ。こを懈を彼をおりる。
吹接ぶ主家の大事。天うち仰ぎて歎息。いぬ如月
朱谷なる。赤精塚鳴動して。一條の妖火両を投て飛去りしと。
獨ふ人ホが生口訴する。つくよりしが。原素彼風流士の大力周防

山口へ飛来て。大内家の仇とする狐大和よあれぐき禍ア。
遂よ彼処へ移導ア。時なるる狐命なるるる。こよまもく
親実ガト笠井の如死をもる。奇こ。奇こと。嘆賞られぞ。三猪
塞る胸ふ死拝。女流なるぐら雄こ。お通姫君のおん供して。一旦
塚を延るとも。往さ死ぬ。ふる教なるん。加藤陶五郎ガ。又ふや屬
けん。主ふや屬ん。縛の容ア紙笠ア母。といとぐ子ア母ア
苦し死胸を。雪花さそと。摧量ア。せあて寸七ガ彼死よ在狐
ちくぐぼを厚金ぬしの。けんまでも存命なるぐ。かる紛素ア
繻を。釋ふ。も又おるべき物を。悔べ悔し死夏ふ。ふよおりひ
絶ぐ死。ぐ所天のそ時も奇し。兄弟四人ア移。共よ。一世ア
厄難生死の際。此牙よつて親と駅の。ぬとろおりひやらと。

卿がまうけし女子どもが身の程なれども數くにぞまた進突と矛を起し。益なき言に時を移しぞ。主君の勘氣免されば。直に君邊へ出仕して。事の趣を告申さん。三勝も夜服をとめて来よ。物共やある供ぞ。その用意せよと呼りつ。注進ぞ入と呼門で走来るものはこれも又槐姫に傳られる。仙野。呂東二道德なり。手を近これを見て陶が反逆ぞ。隆は又子なるあるよし。欽粟が注進によりて先や嘆ね槐姫のうへ心もとなき。述るへといそがせば。呂東二息を吻とつき。官爵高き鶴の峯。大内殿の栄花の夢も。老臣陶が謀反に覚て。築山の御所灰燼となりしかば。一忍軒の入道まで。や撃れ給へども。槐姫をば通どのと某にて守冊させまいらせ一方の囲を伐ひらき辛くして。小保の御の許へさゐる。沢川の辺まで近

延し進らせたりけるに。賊軍隙なく追慕来て。搦捕んと競ひ懸こまに某らくしあいして且く防ぎ戦ふ程に。遂に姫君の往方を失ふこともこれに淺ましく周章しめし大和路をこゝろさしつまふにのがれとおひしかど。漫にあん跡を慕ひて来るとも失ふにおよぶ一昼夜に二三十里宛走のぼりて。今故ゝへ来たりけれども。なほまいく往方ときまるよしなし。願ふに姫を閉出したまへり。然るに八幡も身ひとりん。いづれの時を期せんとて。面の紀浮世に存命べき由るしまへといひも果ず。せびて刃を抜かけて。自殺せんとせしかば。半之進急に推禁め。御身に欽粟耶太郎が言下に命を貸る。潔きに似たれども。真忠臣の所為にあらず。恥を忍び身を保てより直に引かへし。播磨美作。前後備州。姫の先途を見究て。後日の忠義肝要

るゝんと。説諭せば呂東二ハ。今更死ぬるふえ死るんぞとおりゆ
かゝて刃を収め。いざさらば引くゝて。再て安否を告ナさん。尓と
ごうういひうけて。走去るを送ハ。且くと呼びとゞめ。るゝ急るゝふ
貴殿の腰間。路費の用意ありと。[illegible]。餞別せん。と床間ゝる。[illegible]の
蓋うち開きて。投与る包銀。厚志謝ゝるに堪ゝ。と押戴つ
呂東二ハ。背をも不見て。高歩よ。扉を出てたゞ失ゝ。今ゝ果
るゝ平低ハ。緯の容子ふ気を激ーゝ。ゝ生仕ーゝふとも。者
陶五郎ハ逆臣ゝる。晴賢が養ゝるゝれば。ゝ君ゝ死ゝるゝ狡
不覚ゝ。出仕ハ危かゝんとゝ。赤根ハうち点ゝ汝が異見その
理あゝまゝれども陶五郎ハ。養父が野心ゝ豫ゝまゝぬ。君を
裁ゝる親ゝ与せゞ。かゝる大事を人伝よゝさんハ不忠ゝ。ゝゝ

出仕の供ゝせよ。と焦燥ハ涙を禁て三勝が背ゝ。ゝ被ゝる肩
衣も。晴ゝ袖見ゝる。ゝの晴小袖見ゝる。ゝを元夏ゝハ。痩肩の為ゝ
経帷子ゝ。父ゝ君所へゝハ死出の旅迷ゝ。ゝの沢三勝ハ。歎いゝ
ゝ周防ゝ。女児と。ゝ子を。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。
主人ゝ送る奥ゝ門従者ゝらぶ強挟箱。奴隷ゝ。ゝ中抜
藁の。草履穿ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
平低ゝ。撲地と没る死骸の上ゝ。ゝを投ゝて。ゝを元夏ゝ。
ゝゝと泣ゝ。ゝゝゝゝの終焉ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
遑ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。

白夢南柯後記巻之五終